

～シリーズ～「JICA で働く人たちのヒューマンストーリー」

■第1回■ 井上マウロさん（ブラジリア出張所 所員）



★★SF ドラマに憧れ、いつしか日本でコンピューターを学びたいと夢見た少年。

成人後、思わぬきっかけで JICA と出会うことで夢が実現し、同時に半生を捧げる天職にも巡り会えた。★★

32 年間に渡る JICA への功績が認められ、2020 年度 JICA 理事長表彰（内部人材の部）を受賞。JICA ブラジルでは初めての快挙。65 年間の人生をインタビューで振り返りながら、井上マウロさんの素顔に迫る。

「祖父は 1936 年に鹿児島からブラジルに渡りました。日本で競馬を育てる商売をしていましたが、疫病で馬が死に、全てを失いました。そこで『金のなる木』を求めてブラジルに移住しました。」と語る。

祖父はバストスの山を切り開いて綿を作り、その後花卉栽培にも携わった。

「しかし、苦勞の絶えない祖父の姿を見て、父は農業よりも商売を選んだ。」そうだ。父一家は 1960 年にサンパウロからブラジリアに移り、商店を開いた。マウロさん 3 歳のことだった。

当時は Kubitscheck 大統領の強力なリーダーシップのもと首都ブラジリア建設の真っただ中。父の商店には東北地方からやってきた建設労働者も頻繁に出入りした。野菜を食べる習慣がなかった彼らは陳列された葉野菜を指さして「馬のえさだ」と笑ったこともあったという。

地元で公立学校、中学校、高校に通学。

少年のころから当時流行りの SF ドラマに登場する宇宙船を見て、コンピュータに憧れたという。「でもコンピュータを勉強するなら、日本に行きたかった。」と語る。

夢とは裏腹に父が 2 号店を出したのをきっかけにマウロさんも手伝えることになり多忙な日々を送った。それでも夜間は大学に通い、卒業後はコンピュータ関係のコースも受講。

29 歳になった頃、人生の転機が訪れる。

時々通っていた地元の飲食店の日系人オーナーから「JICA が日本の研修プログラムの参加者を募集しているらしい」と聞きつけ、応募した。

結果、2000人の応募者から8名が選ばれ、なんとその中にマウロさんが含まれていたのだ。

「日本でコンピュータ関係の勉強をしたい」という少年時代からの夢が遂に叶った瞬間だった。「本当に嬉しかったですね。」と当時を振り返る。東海大学で「データベース理論」を2年間学んだ。

帰国後、使用した航空券の半券を届けるためブラジリアのJICA事務所に向かった。



初めてJICA事務所を訪れた時、当時の事務所に声を掛けられ、事務所でアルバイトしないか、と誘われた。これがきっかけで5か月ぐらい事務所の仕事に携わり、その後正職員として採用。以後、現在に至るまで32年間勤め上げた。

「もちろん、辛いこともありました。例えば、入社当初のJICA事務所は上下関係が厳しく、失敗をすれば厳しく叱責されました。しかし、辞めようと思ったことは一度もありません。」ときっぱり言う。

こうした粘り強さと前向きな姿勢も手伝って多くの実績を残した。理事長を迎えたブラジル・日本国際協力60周年式典では開催の中心的な役割を果たし成功へ導いた。また、コロナ禍の初期にあつては丁寧なコミュニケーションにより実施機関との関係維持に大きく寄与した。こうした功績も認められ、JICA理事長表彰賞に結びついた。ブラジル事務所スタッフとしては初の快挙だ。

「最初は信じられませんでした。JICA人生で一番嬉しかったことです。」と当時の心境を振り返る。

「私の人生にとって、JICAは『永遠に尊敬する機関』です。私は、この国でJICAが実施してきたリンゴ生産改良のプロジェクト（注1）やセラード農業開発事業（注2）等、大きな貢献があったことを機会あるごとに周囲の人に説明しています。時代と共に、日本の功績だという記憶が薄れることを恐れるから。」



妻ヨシコさんとの間に娘3人を授かった。全員成人しているが、勉学を続けたくて結婚はまだだという。「子供に遺せるのは、教育だけ。小さいときから勉強の大切さを娘らに伝えてきた。」



長女はアメリカ、二女は日本の留学経験を持つ。長女は今後オーストラリアで勉強する計画もあるという。

娘たちは父親の背中を見て、その生きざまに共感したのかも知れない。

ブラジルを飛び出して日本で学ぶことを夢みた父親は、JICAとの出会いにより夢を叶えただけでなく、半生を捧げる天職まで授けられたのだから。

■井上マウロ（いのうえ・まうろ）

1956年サンパウロ市生まれ。牡羊座。JICA ブラジリア出張所の業務班所属、円借款事業等を担当。趣味は料理、ビール大好き。人生のモットーは「人にやさしく、丁寧に」。

- (注1) 技術協力によりふじりんごを導入し農家を育成。当初ブラジルはりんご国内消費の90%を輸入に頼っていたのが、プロジェクトにより純輸出国にまで発展。参照→ [\(ODA\) ODA メールマガジン第337号 | 外務省 \(mofa.go.jp\)](#)
- (注2) 20年に渡るJICA協力により日本国土の5.5倍に相当するブラジル中西部セラード地方の土地改良が進められ、不毛の大地を南半球最大の農業地帯に生まれ変わった。

※～シリーズ～「JICAで働く人たちのヒューマンストーリー」では、ブラジルで国際協力を携わるJICAスタッフを紹介します。仕事面のみならず、これまでの人生や家族の様子、エピソード等も交えつつ、「人」としての姿にスポットライトを当てることで、ありのままの姿をお伝えします。